

事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現

Event-oriented Expressions vs. Meaningfulness-oriented Expressions

佟 一
TONG Yi

要 約

言語類型や個別言語の好みの言い回しについて、主観性のアプローチから分析するのが主流的な手法の1つであるが、このアプローチはいくつかの理論的な問題を抱えている。本稿は、事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現のモデルを提出し、英語・日本語・中国語の言語現象のケーススタディを通して、好みの言い回しの論理と動機づけへの解釈を試みる。

キーワード：好みの言い回し 事態志向型表現 意義性志向型表現

はじめに

言語には、語彙・文法・音声など形式的に分別可能な各部門とは他に、その言語なりの“精神”¹ (genius), 言い換えるとその言語なりの“らしさ”がある (Sapir, 1921: 120)。これに関連し、Whorf (1956: 158) は、“好みの言い回し” (fashions of speaking) の概念を提出している。例えば、同じ聞き手の発話意図を確認する言い回しとして、英語では、“what makes you say that?” という言い回しは問題ないが、日本語と中国語ではこういう言い回しは不自然であり、「どうしてそう言う？」と聞くのが一般的なのは一例である²。言語の“精神”の特徴は、語彙・音韻・文法など、言語の各分別可能な部門を超越し、横断する構造上の特徴として反映されるものであり、その背後には、ある具体的な言語カテゴリーの実態ではなく、多くの異なるカテゴリーを横断的に影響する根本的な発想と論理の違いがあり、これにより、文法的・統語的には問題ないにもかかわらず、異なる言い回しには自然なもの、優先度の高いものや不自然なもの、優先度の低いものが存在するようになり³、乃至まったく異なる言語表現が創発されることもある。

こういった言語の好みの言い回しの違いに関する主流的な考え方の1つは、視点・主観性・事態把握の仕方などの観点から、異なる言語の好みの言い回しの違いを事態把握の仕方の違いと解釈す

る考え方であり、英語は状況から飛び出し、状況を外部から客観的 (= 主客対立) に描写する言語化の仕方を好み、日本語は状況の内部に入り込み、状況を内部で主観的 (= 主客合一) に描写する言語化の仕方を好むと考えられている (池上 2016)。この考え方は Langacker (1985) の視点構図及び生態心理学の知見に基づいたものであり、日本語と英語の対照に対して高い解釈力を見せているが、以下の3つの点で問題があるように思われる。

1. 典型的な事態把握の仕方は主客合一と主客対立という2つしかないと考えられているため、全ての言語の好みの言い回しはこの二項対立に位置付けられることになるが、これでは他の言語についての解釈力が問題となるように思える。
2. 事態把握の仕方がそのまま言語化の仕方を決定するのかが疑問に思える。例えば、野村 (2011: 7) は (1) を挙げ、「1人称明示／非明示型の相違が事態把握の違いを表しているなら、このような短い文章でも事態把握の仕方がくるくる変わることになるが、それでいいのだろうか？」と問いかけている。

- (1) What a glorious day! The sun is shining, the sky is blue, and the scenery is spectacular. There's snow all around φ, as far as I can

see, and no smog at all. I feel great! ϕ Wish you were here.

本稿では1人称の問題は取り扱わないが、野村氏の問題意識の本当の在り処は、言語化の問題を事態把握の仕方と直接的に結びつけて良いのかというところにあり、これは主観性のアプローチの根本的な理論上の問題と思われる。

3、言語類型を“主観的”“客観的”に分類して妥当なのかは問題に思える。大塚・岡（2016：12）が指摘している通り、“主観的”“客観的”という用語は、「言語の優劣を評価する言説に使われるならば、言語社会学的に言っても大きな問題になると思われる」。

故に、以上の問題点を解決または回避できる、かつ言語事実に対して劣らない解釈力を持つアプローチが必要ということが分かる。本稿の目的は、好みの言い回しの違いを記述し解釈する1つの類型的パラメータとして、事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現のモデルを提出し、これを以て英語・日本語・中国語の好みの言い回しのいくつかのケーススタディを行うことである。

1、事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現のモデル

本節では、事態志向型表現と意義性志向型表現のモデル（以下では“本稿のモデル”）を提出する。

“事態”は本来言語学の基本概念の1つである。辻（2013：144）は“事態”を、「人間が認知し、脳の神経組織に痕跡が残された認知上の事象」と極めて広義的に定義しているが、本稿のモデルでは“事態”を客体ベースの概念と捉え、客体間の働きかけ即ち力のやり取りなどの基本要素によって構成されるのが事態だと定義する。そして“客体”とは、一定の属性を持ち、他の客体からの働きかけ即ち力を受けて状態を変えることが可能で、また他の客体にも働きかけることが可能な個体のことである。これらの内容を言語化するのが事態表現である。事態における客体は、更に事態主体（主語）・事態対象（目的語）など異なるタイプに分けられる。“客体”は人間の認知にある一種のスキーマと把握の仕方であり、ある概念内容が“客体”ということは、人間がその概念内容

を“客体”として把握していることを意味する。定延（2010）がまとめた、認知文法のビリヤードボール・モデルなど、伝統的な認知言語学の研究において用いられる、力のやり取りと力の発散に基づくモデルは、事態表現を記述するモデルと捉えることができる。

しかし、客体や事態だけが言語表現の全てではない。“事態志向”と“意義性志向”の分類に基づく最も根本的な公理は、人間の根本的な関心は意味である、ということである。客体・事態は意味の拠り所であり、客体・事態が存在していなかったら、意味の存在もありえなかったのである。例えば、“りんご”は場合により、甘酸っぱい体験・渇きの緩和・栄養価・禁断の果実等々、様々な意味を持つことが可能であるが、これらの意味は全て、“りんご”という客体を拠り所とする。一方、言語は根本的に言うと、客体・事態ではなく、意味を表現・伝達・交流するものと思われる。本来、客体・事態が言語化されるのは、意味の拠り所になっているからと思われる。言語記号は全て一定の意味を持つが、具体的な文脈や実際の言語使用の現場において意味を持つとは限らない。実際の言語使用は、意味だけではなく、具体的な使用場面に適した意義性を持ち合わせていることも必須である。本モデルで言う“意義性”は即ち、ある内容が実際の言語使用に適した意味があるかどうかという性質またはその意味の内容である。言い換えると、“意味”とは、“形式”や“音韻”などと対照した意味で定義された言語学の基本部門である一方、“意義性”は言語学以外の場で一般的に語られる“意味”のことであり、言語学特有の概念ではなく、人間のあらゆる活動における基本関心である。

最も単純な形で立ち現れる意義性は、本来特に決まった形式上のルールを要求せず、一定の言語記号で、意義性を満足に表現できれば十分と思われる。これは言語の経済性とも合致する。例えば、聞き手にその場で即座に使用可能なナイフが存在するかを確認する場合、最も単純に必須な意味を表現する言語化の仕方は（2）の具合である。（2）では、意義性のある客体“ナイフ”と存在を表す“ある”が簡単に並べられているだけで、確認はイントネーションによって表出されており、他の内容や形式上の特別なルールは一切必要な

い。

(2) ナイフある？⁴

この単純に意味を表現する言語化の仕方は、中国語では非常に際立っている。(3)を見られたい。

(3) a. 我 20 岁。

1 岁⁵

私、二十歳だ。

b. A: 有 米 吗？

有 米 SFP

米ある？

B: 有。

ある。

(3) a は話し手は何歳なのかを伝達するものであり、自称詞と歳だけで文が完成する。(3) b では、Aが“米があるか”を確認するが、存在を表す動詞・確認の対象である“米”及び疑問を表す文末助詞だけを言語化すれば良いわけであり、他の内容の言語化は必要ない。そしてBの答えでは、確認の対象は“米”なのが明白であるため繰り返し言語化する必要はない。故に「ある」だけで答えれば良い。英語で言うと、例えば“私は背が高い”という意味を表現したい場合は、本来“I tall”乃至（主体が明白であれば）“tall”だけでこの意味は十分に表現できたはずである。

このように、言語化の仕方の理論上の原点は、意義性のある内容だけを単純に並べることであり、これは言語の経済性が最大限に働いている場合とも捉えられる。言い換えると、本来では意義性のある部分だけを言語化したら事足りるはずだったということである。しかし、実際の言語化の仕方はこれより遥かに複雑である。現に英語では“I'm tall”のようにコピュラが必要であり、(2)でも「は」と「が」の問題などが関わってくる。つまり、他のファクターが機能しているということが推測できる。即ち、他のファクターの機能により、言語の経済性が最大限に働いていないという可能性が十分にあるということが分かる。故に、さらなる類型論的な区別の可能性と必要性が導き出される。

以上を踏まえて、事態と意義性の問題に戻ると、意義性は客体や事態に基づいているが、両者の間に乖離がよく生じることが分かる。具体的な状況・場面・事態から切り離された客体は、事態の構成要素にも、意義性の拠り所にもなることができる。しかし、状況・場面の具体化が進むに連れて、事態と意義性の乖離が次第に生じてくるのは、よくあることである。(4)は一例である。

(4) a. A: これは何ですか？

B: カレント・フックだ。文字通り引っ掛けて使う。

(ぐらんぶる)

b. A: What's this?

B: It's a reef hook. You use it by hooking it.

c. A: 这 是 什么？

これ COP 何

これは何？

B: 这 是 刮缝钩。

これ COP カレント・フック

これはカレント・フック。

是 挂着用 的。

COP 引っ掛けて使う ものだ

引っ掛けて使うものだ。

(4) a はアニメにあるダイビング機材の使い方を説明するセリフであり、bは公式英語版の訳であり、cは筆者による中国語訳である。bにおける下線部の“you”は、意義性のない内容である。なぜなら、その機材は聞き手しか使えないというわけではない。しかし、“you”は確かに“カレント・フックを使う”という事態の主体（より正確に言うと、可能な主体の1つ）である。このように、(4) bにおける“you”において事態と意義性の乖離が見られる。

典型的な事態表現は、事態の各要素を遍く言語化するものである。例えば(4) bのBの発話は典型的な事態表現と言える。しかし、これは意義性のある要素しか言語化しない方略とは相反するところがある。このように、事態表現を重要視するか、意義性のある部分の言語化を重要視するかにより、2つの異なる方略が成立する。前者によって動機づけられる表現を“事態志向型表現”、後

者によって動機づけられる表現を“意義性志向型表現”と呼ぶ。事態志向型表現は、事態表現として言語化を行い、事態の構成要素ではない内容を排除する傾向性がある。一方、意義性志向型表現は事態表現からの制約が低く、意義性のある部分を言語化する表現である。例えば、事態の各要素を遍く言語化しようとする傾向性が事態志向であり、一方、常に各要素の意義性を計算し、言語化するに値する意義性が不十分（e.g. その要素は先行文脈では既に明白になっているなど）と判断すればそれを非言語化するという傾向性が意義性志向といえることができる。

本稿のモデルは異なる言語を類型論的に分類することを目標とすることに注意していただきたい。客体・事態は人間の普遍的な認知構造の一部であり、客体・事態がなければ意義性も存在し得ない。故に仮説として、事態を言語化する表現が存在しない言語は考えにくい。一方、客体・事態ではなく、意味即ち意義性の方が人間の一般的な関心だと思われる。以上の両方が合わさって、以下の仮説に繋がる。即ち、基本的に、自然言語の中では、事態を言語化する表現と意義性の表出は、基本的に複雑に絡み合っている形として共存していると考えることができる。故に、事態を言語化する表現と意義性志向型表現は、複数の言語化形式として1つの言語の中で共存することは、十分可能というより、むしろ必然というべきだと思われる。文法化理論における“重層”（layering）という概念は、これと密接に関係している。“重層”とは、2つまたはそれ以上の文法形式が共存していることを指す（Hopper, 1991）。Hopper（1991: 22）は、文法化を新しい形式が次々と生まれてくる歴史的な過程として捉えた上で、“layering”について、“Within a functional domain, new layers are continually emerging. As this happens, the older layers are not necessarily discarded, but may remain to coexist with and interact with the newer layers.”と指摘している。本稿では、事態志向型表現と意義性志向型表現の重層性を、新しい文法形式と古い文法形式が競合する歴史的な文法化の過程という観点から捉えるのではなく、あくまでも平等な2つの方略による複数の形式の共存として捉える。この重層性が、自然言語の表現を豊富にする。通言語的に見られる言語化

の仕方は本稿のモデルの関心ではない。言語の表現を可能な限り総合的に観察し、そこから異なる言語の事態志向性または意義性志向性の度合いの差異を見出だせると思われる。言語における意義性志向性が高いと言っても、事態を言語化する表現が排除されるというわけではなく（逆もまた然り）、2種類の方略が共存するということである。

事態志向と意義性志向という方略の違いは言語の多くの異なるカテゴリーを超越し、横断するものであり、その働きにより、異なる表現が創発され、また同じ状況に対する言い回しも異なることになる。ただし、実際の分析にあたって、どのような表現が事態志向型表現、どのような表現が意義性志向型表現なのかは、具体的に見る必要がある。本稿では、このモデルを運用していくつかの言語現象をケーススタディとして分析する。

2, 客体論理性から見た事態志向型表現と意義性志向型表現

事態は客体によって構成される。故に、事態志向型表現は、客体論理に基づいているという特徴がある。客体論理性の具体的な指標として、状況を事態、言い換えると客体及び客体間の力のやり取りとして言語化することや、客体の数の概念を常に文法の基本的な関心としていることが挙げられる。しかし、意義性志向型表現の論理から見ると、客体による力の働きかけは常に最も意義性のある部分とは限らなく、また数の概念も常に意義性があるとは限らない。故に、意義性志向型表現では、客体論理は意義性が薄い場合では客体論理に従わないことがある。英語では、こういう典型的な客体論理に基づいた表現が見られるが、日本語と中国語では、それとは異なる表現が成されることがよく見られ、事態志向型表現と意義性志向型表現の対立が見られる。

まず、(5) (6) (7) を見てみよう。これらの例は、上述の客体論理性の一番目の指標を示している。

- (5) a. What is this?
b. これはどうということだ？
c. 这是怎么回事？
これ COP どう CLS こと
これはどうということ？

(6) a. What makes you say that?

b. なぜそんなことを…?

c. 为什么 这么 说?

なぜ こう 言う

なぜこんなことを言う?

(7) a. What happened to you?

b. どうした?

c. 你 怎么 了?

2 どう 完了

あなたは どうした?

これらの例における英語の表現の特徴は、状況を客体間の力のやり取りとして把握した上でその客体について確認することであり、高い事態志向性が見られる。例えば (6) a はある客体の力の作用が聞き手を言わせているように把握し、その客体を確認している。一方、日本語と中国語ではこういう言い回しを好まず、状況を直接的に確認する（これは即ち発話時点において重大な意義性のある部分である）ように言語化している。例えば (6) b / c では聞き手が言う理由を確認している。

また、客体論理性の度合いは、数の言語化にも反映される。事態志向型表現の論理に従えば、客体は1つ1つの個体として認識されるため、数に関する情報は常に名詞に付属していることになる。故に、数えられる・数えられないという区別、または単複数の区別は重要な文法ルールとなる。しかし、意義性志向型表現の論理からすると、数に常に意義性があるとは限らないため、数に関する情報の言語化は義務ではなく、数を明示することに明白な意義性がある場合明示すれば良いということになる。

そして、数の概念において、英語では数が常に文法の基本的な関心の1つであるが、日本語と中国語ではそうではないという違いが見られる。

まず、(8) が示している通り、英語では、カテゴリーの属性を説明する際に数に関する情報が必要であるが、日本語と中国語では必要ない。

(8) a. A whale is a mammal, not a fish.

b. クジラは哺乳類であって、魚ではない。

c. 鲸鱼 是 哺乳动物, 不 是 鱼。

クジラ COP 哺乳類 NEG COP 魚

クジラは哺乳類、魚ではない。

(8) b / c は、あるカテゴリーの全ての具体例に共有されている属性について説明している文であるため、そのカテゴリーの具体例にとって数の概念は意義性を持たない。つまりカテゴリーの属性を説明する際、日本語と中国語は意義性志向型表現を好むというわけである。一方、英語では数が必要ということは、つまりカテゴリーの具体例が共有する属性を説明する際、客体的世界から1つの客体を仮想的にピックアップして、それを同カテゴリーの全ての具体例の代表とした上で、属性の説明を行うというわけである。即ちカテゴリーの属性を説明する際、英語では事態志向型表現を好むというわけである。

もう1つのケースは、客体AをカテゴリーBの複数の具体例の中の1つだけに関連付けられれば良い、もしくは1つだけに関連付けることが可能である場合は、英語では“one of B”でBの具体例を言語化することはよくあるが、日本語と中国語ではBだけを言語化すれば良いである。

(9) I'll bet Jacques Saunier was on one of those lists. (*The Da Vinci Code*)

(10) I'm guessing you don't have a key in one of those fancy pockets? (*Resident Evil 2*)

(9) (10) における“Jacques Saunier” “key”はそれぞれAに、“those lists” “those fancy pockets”はBに当たる。客体から構成される事態の観点から見ると、事態はBの中の1つの客体において発生するのは確かである。故に、英語における“one of”でBの具体例を言語化する表現を事態志向型表現と捉えれば論理が通っている。一方、重大な意義性は、AとBの関連付けの可能性・妥当性であり、この意義性はBの全ての客体に等しく共有されている。故に、意義性志向の論理によれば、“Bの中の1つ”と言語化する必要はない。このように、日本語と中国語ではこの問題において意義性志向型表現を選択しているということができる。

3, メタ事態的構造としての意義性志向型表現

意義性は人間の普遍的な関心であるが、言語表現のレベルでは、表現された意義性に真っ先に関

係してくるのは発話現場に居合わせた人間即ち話し手と聞き手である。故に、ある事態に対する話し手と聞き手の受け止め方は意義性の重要な内容になることが分かる。また、話し手と聞き手の受け止め方は表現される事態の内容に基づくことは言うまでもない。この意味では、話し手と聞き手の受け止め方はメタ事態的な意義性と言うことができる。以上の論理背景により、表現される事態の後に来る対人モダリティは、“メタ事態的構造”という一種の意義性志向型表現として創発されるわけである。その関係は図1で図式化できる。大きな矢印はメタ事態的構造である対人モダリティが成立する過程を表し、この過程は“メタ化”とも言える。メタ化が行われる度に、階層が1つ増え、メタ化が行われる前の階層を円形で括って示す。言語化のレベルでは、メタ事態的構造としての対人モダリティは、事態の内容が全て言語化されたらその後に付ける。

ただし、これはメタ事態的構造における非メタ的階層は事態を描写する内容しかないというわけではない。メタ事態的構造が文法的カテゴリーとして成立する以上、言語化レベルでは、実際に内容性を持つ表現即ち“文”の最後という位置付けとして定着する。それと対照となる文は必ずしも事態を描写するものである必要はない。言い換えると、メタ事態的構造は、実質的には文末に来ることになる。図1において話し手と事態を締め括る部分は実質上では“文”であると理解することができ、言語化の順番は、内部の階層から外部の階層へと逐次に言語化するというわけである。事態を指している矢印は文の言語化過程を表し、聞き手に指している矢印はメタ事態的構造としての文末対人モダリティの言語化過程を表す。

日本語と中国語は類似的に、文末助詞で対人モダリティをマークする現象が基本的な文法構造の一部を成しており（中国語における「哦」「呀」「啊」「吧」などいわゆる“文末語気助詞”というカテゴリーはこれに相当する）、これはメタ事態

的構造の典型的なケースである。しかし、文末に対人モダリティは事態表現ではないため、事態志向型表現ではない。故に、メタ事態的構造は存在しない点では、英語はより事態志向的と言えよう。

誤解されやすいかもしれないが、意義性志向型表現＝モダリティという図式が成立するわけではない。モダリティは通言語的なものであるが、事態志向と意義性志向の違いはそれをどのように言語化する点にある。事態の相として把握されるモダリティは事態の一部である。例えば、“This may happen”はモダリティ“may”を含んでいるが、“may”は“this”という客体が“happen”するという事態の相を言語化するものであるため、事態要素であり、この表現全体は事態表現の特徴を呈している。日本語と中国語にも、同じ事態の相を言語化するモダリティが存在しており、英語と同様に事態志向性が見られる。しかし、文末対人モダリティは事態の相を言語化するものではなく、文全体をマークするものであるため非事態的な構造であり（そもそも文末対人モダリティをメタ事態的構造と呼ぶのがこのためである）、日本語と中国語には文末対人モダリティがあるが英語にはない分、英語の事態志向性が高く、日本語と中国語は意義性志向性が高いことが認められる。

また、中国語では、言語ユニットの用法の成立の論理のレベルでは、本来事態を描写するマークがメタ事態的構造へと拡張しているケースもある。ここでは、こういうケースの1つである「了」について分析する。

まず、「了」には、完了のアスペクトがあり、これは事態が既に完了していることをマークするもので、勿論単純に事態を描写する用法である。

- (11) 我 吃 了 两 个 苹果。
 1 食べる 完了 2つ CLS りんご
 私はりんごを2つ食べた。

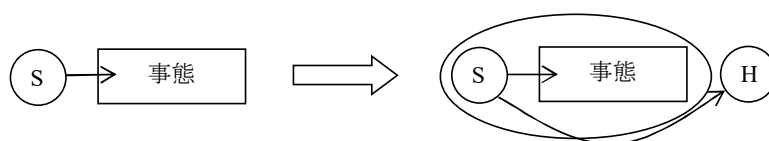


図1 メタ事態的構造の成立過程

しかし、「了」は文末助詞としても用いられ、事態の完了では説明できない用法が多数ある。以下の例を見てみよう。

- (12) 他 不 走 了。
3 NEG 行く SFP
彼は行かないことになったよ。

(12) は、話し手は発話前に聞き手の認識は“彼は行く”に留まっていると判断し、その状況の更新を伝達する文である。「了」を付けなくても文は成立するが、その場合は「彼は行かない」という単純報告となり、「行かないことになったよ」という具合に変化を聞き手に意識させるニュアンスはない。

- (13) 太 好吃 了！
過ぎる 美味しい SFP
美味しい！
(14) 这 鞋 太 大 了。
この 靴 過ぎる 大きい SFP
この靴は大きすぎる。

(13) (14) では、「了」は「太」と共起し、程度が非常に高い、もしくは程度が望ましい限度を超過していることを表す。

- (15) 这 个 办法 最 好 了。
この CLS やり方 最も 良い SFP
このやり方が一番良いのだ。

(15) における「了」は、“一番良い”ということをやより強く聞き手に訴えかけているというニュアンスがある。この文は「了」を用いなくても適格であるが、その場合は「このやり方が一番良い」という単純報告となる。

- (16) 别 磨蹭 了, 走 了, 走 了！
NEG グズグズする SFP 行く SFP 行く SFP
グズグズしないで、行こう行こう！

(16) は「了」の命令文における用法である。命令文であるため、事態の完了とはまず無関係である。(16) は「了」を使わなくても命令文とし

ては適格であるが、その場合は絶対に有無を言わせない、非常に強い口調の命令文になる。

上掲の「了」の特徴を見ると、「了」の意味プロトタイプを見極める難しさが窺える。伝統的な中国語文法論では、完了の「了」と文末助詞としての「了」を「了1」と「了2」に分けて論じるのが一般的である（黎1924, 吳2002, 肖・沈2009など）。蕭（1999）に至っては、「了」に8種類の「相互対立而不交叉」（「相互に対立し重ならない」）意味があると指摘している。図1のモデルを運用すれば、「了1」と「了2」の分化は、用法の成立の論理レベルでは、実は「了」が事態の相を描写するマーカーからメタ事態の構造のマーカーの用法へと拡張した結果と解釈することができる。“完了”は事態の相であるが、この“完了”の意味特徴は、事態の領域を越え（＝メタ化）、聞き手に、聞き手の認識のある種の“変化”もしくは“更新”を促すというメタ事態の用法へと拡張したのが「了2」というわけである。“完了”により、事態が“未完”の段階と“完了”の段階に分けられるように、“完了”と“変化”“更新”には認知上の関連性がある。故に「了2」は、聞き手の認識にある種の“完了”を意識させる対人モダリティ・マーカーと捉えられる。逆に言うと、聞き手の認識に何らかの“変化”や“更新”を行わせる必要性が認められないのであれば「了」は付けられないことが分かる。

例えば、同じ程度が高いことを表す文として、「了」は“属性が限度を超過している”ことを表す「太」と共起できる。聞き手の認識には、元々“属性が限度を超過している”という認識がないと判断することは可能であるため、そこから“変化”“更新”を意識させる必要性が生じる。例えば、(14) における「了」の機能は、“靴が大きすぎる”と、聞き手に聞き手の認識の更新を提起することと解釈できる。一方、客体の属性が“本当に・実に高い”の意味を表す「真」または単純に“程度が高い”ことを表す「好」とは共起できない。

- (17) a. 这 糖 {真 甜 /*真甜了}。
この 飴 本当に 甘い SFP
この飴は本当に甘い。

- b. 这 糖 {好 甜/*好甜了}。
この 飴 すごく 甘い SFP
この飴はすごく甘い。
- c. 这 糖 {太 甜/太甜了}。
この 飴 すぎる 甘い SFP
この飴は甘すぎる。

(17) a/bは「飴」の属性を描写している文で、「了」は用い得ないが、(17) cは用い得る。

しかし、「真」が「了」と共起できる場合もある。

- (18) 这 人 真 神 了,
この 人 本当に 神 SFP
この人は本当に神がかってる。
什么 事 都 看得透透 的。
何 こと も 見通し ものだ
何もかもお見通しだ。

「真」と「了」が共起できる場合と共起できない場合の違いは何かというと、(17) では、「飴」は客体であり、「甘い」などの属性がある。この場合、「真」は単純にその属性が高いことを表すため、そこに認識の“変化”や“更新”を意識させる必要性が認められない。一方、(18) は、対象の客体自身の属性について語っているわけではない。「この人は神がかってる」というのは、“この人”自身に“神がかってる”という属性があるというわけではなく、“状況がお見通し”というパフォーマンスに対する評価であり、そこには、パフォーマンス前とパフォーマンス後という2つの段階が生じ、認識の“変化”“更新”を意識させる必要性が生まれてくる。逆に、(19) は(18)と評価対象も統語的形式も同じであるが、“この人”自身の属性を評価する文で、聞き手に聞き手の認識の“変化”“更新”を意識させる必要性がないため、「真」と「了」の共起はできない。

- (19) a. 这 人 {真 高/*真高了}。
この 人 本当に 高い
この人は本当に背が高い。
- b. 这 人 {真 聪明/*真聪明了}。
この 人 本当に 頭がいい
この人は本当に頭がいい。

ただし、「高」(「背が高い」)は、「背が伸びる」という動詞の意味も持っており、「了」と共起できる。この場合、単純に「了」の用法を“完了”と捉えれば良い。

また、“程度が十分に高い”という意味を表す「很」も、“変化”“更新”を読み取れるのであれば「了」との共起が必要であり、読み取れなければ共起できない。

- (20) a. {很 好/?很好了}。
とても 良い
良い。
- b. 已经 {?很 好/很好了}。
もう とても 良い
もう良い。

(20) aは「宜しい」という具合で“十分に良い”という意味を表す文で、「了」との共起の適格性が低いが、(20) bは“もう十分に良い”という意味で、「了」を付けた方が適格である。「已经」(「もう」)により、聞き手に“もう十分に良い”と認識を更新させる必要性が認められるようになったためである。

次に、命令文に用いられる「了」も、聞き手に“ある行動を実行する”ように聞き手の認識の更新を促すと解釈することができる。(21) は一例である。

- (21) 好 了, 别 闹 了。
良い SFP NEG ふざける SFP
もう良い, ふざけるな。

(21) における「好了」は「もう良い」という意味であるが、“十分だ、これ以上やるな”という具合で、聞き手に現在の行動をやめさせる言い回しとして多用されており、聞き手の認識の更新を促すという解釈が適用できる。そして命令文の部分にも、「了」は“行動をやめろ”と聞き手の認識の更新を促す機能を果たしていると捉えられる。

「了1」は事態の完了を表すものであり、「了2」はメタ事態的構造の用法であり、条件が満たされれば、1つの文に両方が同時に出現しても問題ない。(22) は一例である。

- (22) a. 我 吃 了 两 个 苹 果 了。
 1 食べる 完了 2つ CLS りんご SFP
 私はもうりんごを2つ食べたよ。
 b. 我吃了两个苹果。(=11)

(22) a における1つ目の「了」は、“りんごを2つ食べた”という事態の完了を表す「了1」であり、2つ目の「了」は、聞き手に“りんごを2つ食べた”というように認識を更新させる「了2」である。2つ目の「了」を言語化しない文は (22) b である。a と b を比較してみると、b は単なる事実報告であるが、a は、“これ以上食べられない” “もうりんごは十分に食べた”などの語用的推論を引き起こす発話の力 (illocutionary force) を備えているという違いがある。これも聞き手に聞き手の認識の更新を意識させる「了2」の効果と言える。

以上の分析に基づいて、図1のモデルを用いて、「了1」と「了2」を図2のように位置づけることができる。「了1」と「了2」を繋いでいる二本の平行線は拡張を表す。

メタ事態的構造である「了2」は、文末に来な

ければならない。しかし、二種類のメタ事態的構造が1つの文に現れる場合、語順はどうなるかという問題がある。「了2」は事態の完了相マーカである「了1」から拡張してきたものであるため、純粋なメタ事態的構造ではない。一方、「呢」「吗」「吧」「啊」などいわゆる文末語気助詞は、事態の相を表すものではなく、事態表現の性質を持たないより純粋なメタ事態的構造である。メタ事態的構造は文の後に来るということは、より純粋なメタ事態的構造である程、語順上では後にくることを意味する。故に、「了呢」「了吗」「了吧」「了啊」などが存在するが、「*呢了」「*吗了」「*吧了」「*啊了」が許容されないことが示しているように、文末語気助詞は常に文末に来るという絶対的なルールが成立し、「了2」と同時に用いられる場合、「了2」はその直前に来ることになる。図3を参照されたい。事態もしくは文が基本階層を成し、その上に「了2」がメタ事態階層を構築するが、「了2」は非純粋なメタ事態的構造を成すものであり、その上に更に純粋なメタ事態的構造を成す文末語気助詞がより高次的なメタ事態階層を構築する。

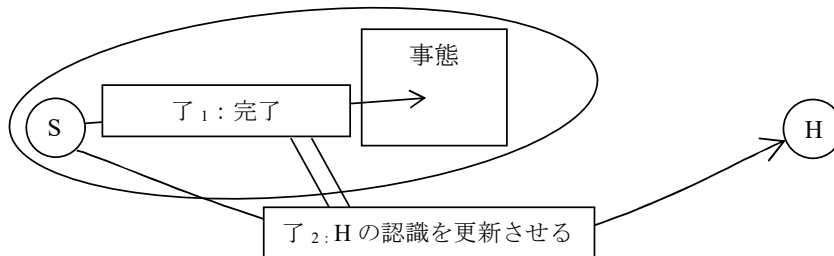


図2 本モデルにおける「了」の位置付け

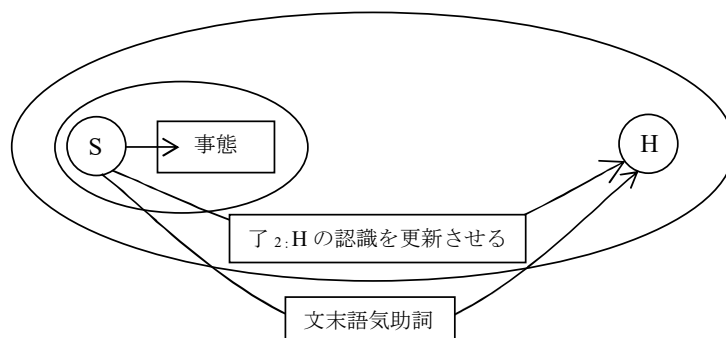


図3 「了2」と文末語気助詞からなる多層的メタ事態的構造

4, 意義性志向型表現としての題目マーカー

題目マーカーとしての「は」の論理をどのように解釈すべきかは、伝統的な日本語研究の大きな理論的関心の1つである。尾上(1995:30)では、「は」の機能について、以下のような指摘をしている。

- (23) 全ての文は[...]根源的な排他性を持っているものである。世界は[...]無数の事態の集積であると言えるが、文を語るとは、そのような事態の集積としての世界の中から一つの事態に光を当てて取り出すことにほかならない。その意味で、文を述べることの中には根本的に排他性が内在していると言わなければならない。

この論理に基づいて、氏が指摘した題目の要件には、「表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある」というものがある。

この論理と事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現のモデルとの親和性が良いことは注意していただきたい。(23)の「世界は無数の事態の集積」における「世界」は本モデルという事態の世界に相当することが分かる。そして、題目とは表現の流れにおいて、切り出され、特別な位置に置かれた部分ということは、即ち題目は話し手が特別な意義性があると認定し、事態の世界から主体的に意義性の領域に切り出した内容だと理解することができる。

話し手が事態の世界の一部を主体的に切り出し、特別な位置に置いたのが題目である。話し手はまず題目を切り出し、「は」でマークし、題目に関する表現したい内容を言語化する。久野(1973)は、「は」は“主題”と“対照”という2つの用法があると指摘しているが、この2つの用法の論理は以下のように解釈できる。“主題”は話し手が切り出した内容であるが、この内容の下でもう1つの普通の主述関係が問題なく出来る。例えば「象は鼻が長い」における「象は」の部分は特殊な意義性を持つ内容として話し手が切り出した題目であり、その題目の下で「鼻が長い」という主述文が出来る。“対照”と特殊な意義性を

持つ内容として話し手が切り出した題目との繋がりはより直接的であり、特殊な意義性で切り出された内容は、自ずと他の内容との対照の意味を内蔵していると言える。

次に、中国語について見ると、中国語の「是」は、コピュラの役割を持つと同時に、「は」と似たような用法もある。以下の例文を見てみよう。

- (24) 他 是 我 爸。
3 COP 1 父
彼は私の父。
- (25) 他 是 已经 走 了 吗?
3 COP もう 行く 完了 SFP
彼はもう行ったというの?
- (26) 不 是 你 听错 了,
NEG COP 2 聞き間違える 完了
あなたが聞き間違えたのではなく、
是 我 没 解释 清楚。
COP 1 NEG 説明 はっきり
私がちゃんと説明できなかったのだ。
- (27) 他 是 很 有 能力。
3 COP とても 有る 能力
彼は確かに有能。
- (28) 他 是 个 日本 女人。
3 COP CLS 日本 女
彼は日本人女性。(“彼の使用人は日本人女性”という意味)(cf. 沈2012)

(24)の「是」は英語のbe動詞と類似的に、2つの要素の同定関係を表す典型的なコピュラ用法であるが、(25)の「是」は、“彼がもう行った”ことへの確認をより際立たせるためのマーカーであり、「是○○吗」で意味的に日本語の「○○というのか」に相当する。「是」を使わなくても文として成立するが、その場合は単純に「彼はもう行ったか」という疑問文になる。(26)の「是」は、対照の意味で“AではなくBなのである”という用法である。「○○である」という意味から見ると、コピュラとして解釈しても良いように見えるが、「是」の前に主語は要らず、いきなり「是」から文が始まるという点で特殊である。(27)の「是」は、「彼は確かに有能だが、他の問題はあある」というような具合に、逆接の前置き表現というニュアンスが強く、発音にストレス

を入れることが必要である。(25) と類似的に、「是」がなくても文は成立するが、その場合は普通に「彼は有能」という命題を報告する文となる。(28) の「是」は、文脈が既に“使用人”に限定されている場合のみ可能な表現であり、日本語の“ウナギ文”に相当する用法である。

「是」の以上の用法から分かるように、「是」も話し手が主体的に事態の世界の一部を特殊な意義性のある対象として切り出し、それを題目として叙述するという意義性志向型表現の側面がある。また、(26) のような主語が要らない「是」は、聞き手に語られる内容を認識させる用法であり、客体について語っているわけではないため、その前に客体は必要ない。これも「是」における意義性志向性の反映と言える。

「是」が基本的に意義性を表出するマーカーである証拠の1つは、英語などヨーロッパ言語のコピュラとは異なり、「是」はコピュラの性質を持ちながら、テンス情報を持ち合わせていないという特徴である。「是」が用いられる場合、重要なのはあくまでも語られる内容であり、事態の発生時点ではない。故に、「是」は基本的には意義性を表出するマーカーというわけである。以下の例を見てみよう。

- (29) a. Are we talking about...an invasion?
(*Transformers*)
b. 異星人の侵入ってこと?
c. 你 是 说 外星人 入侵?
2 COP 言う 異星人 侵入
あなたが言うのは異星人の侵入?

(29) a は現在の話題の内容を確認する際の英語の常用表現“we are/are we talking about”の一例であり、“私たちが今(異星人の)侵入について話している”という事態を疑問文として言語化する事態志向型表現であるが、日本語と中国語では、異星人の侵入という重大な意義性のある部分を確認している。ただし、同じ意義性志向型表現であっても、意義性の表出の仕方が異なる。日本語では、「こと」を用いて、現在話し手の認識の中で重大な意義性を担っている内容は“異星人の侵入”であることを言語化しているが、中国語では、「あなたが言うのは異星人の侵入?」の具合

に、重大な意義性を談話に持ち込んだ当人である聞き手にその意義性を確認している。注意すべきなのは、(29) c は、「あなたが異星人の侵入について話している」という事態志向型表現のように見えるが、そうではない。「是」はテンス情報を含まないため、(29) c は“あなたが異星人の侵入について話している”という現在の事態を言語化しているのではなく、単純に聞き手に話の内容を確認しているという意義性志向型表現なのである。

本節の内容をまとめると即ち、題目マーカーは特殊な意義性のある内容を切り出すという意義性志向型表現というわけである。また、中国語の「是」の振る舞いからも分かるように、コピュラは言語一般的なカテゴリーでありながらも、題目マーカーとして用いられることもある。

5、意義性志向型表現としての動詞の「う・よう」形

(30) a のような「う・よう」は、伝統的な日本語文法では意志を表す表現とされている。本節ではこれを動詞の「う・よう」形と呼ぶ。そして、本節では、意義性志向型表現のケーススタディとして、動詞の「う・よう」形の問題を取り上げる。動詞の「う・よう」形は単純に意志を表すマーカーにしては特殊な性質がある。まず、意志は主体があるのに、(30) のような主体を言語化するのが難しい動詞の「う・よう」形が見られる。

- (30) a. 暑さに負けずに頑張ろうね。
(cf. Hasegawa, 2010 : 151)
b. ? [私/あなた] は暑さに負けずに頑張ろうね。

次に、話し手が会話の流れに配慮せず、自由に意志を表したい場合、優先的に選択されるのは「たい」もしくは無標であり、動詞の「う・よう」形ではない。これと関連しているが、日本語では話し手自身の心理状態と他者の心理状態が厳しく区別されているのに反して、動詞の「う・よう」形は他者である聞き手を巻き込むことができるという特徴があることは早くも指摘されている(森山1990: 3)。

この2つの事実を踏まえて、本稿では意義性志向型表現の概念に基づいて、動詞の「う・よう」形を意志表現として捉えず、その意味プロトタイプを以下のように規定する。

- (31) 動詞の「う・よう」形は、話し手が発話現場においてある動作を行うことは意義性があると賛同され得ると判断し、その動作の実行を宣言もしくは提案する意義性志向型表現である。

即ち、聞き手はその動作は発話現場において有意義と賛同し得ると話し手が判断し、それを「う・よう」で言語化することにより、会話の流れを聞き手が想定できる方向性の一つに運び、進行中の会話が流暢に回転していくことに助力しなければならない、ということである。動作の「う・よう」形が意志を表すことができるのは、有意義な動作の実行を宣言・提案することは自ずと意志と関わっていると考えられる。

例えば、「帰る」「行く」は、何の前置きもなくいきなり発言することができるが、「帰ろう」「行こう」などを発話するには、話し手自身にそういう意志があるだけではなく、話し手が、現前の会話の流れ・場面・状況などにおいて、“帰る”“行く”という行動は既に有意義な行動として聞き手の認識に活性化されていると判断することも必要である。

単純な意志表明に対して、聞き手が意志表明を行う理由について推論を行う。なぜなら、一人で意志の内容を問題なく行うのであればそれを行えば良いわけであり、わざわざ言語化する必要はない。意志を言語化するにはそれなりの理由が必要である。例えば、「アイスが食べたい」と言われると、“アイスを食べる”という動作は聞き手の何らかの協力 (e.g. 話し手にアイスを買ってあげる・取ってあげる・食べるのを許可するなど) がないと実現できないという語用的推論が行われる。もしそういう協力の必要性が思い付かないのであれば聞き手が「食べれば？」と答えることはある。一方、動詞の「う・よう」形は、発話現場において有意義な行動を行うことを提起する表現であり、聞き手が表現される行動の意義性について推論を行うわけである。

動詞の「う・よう」形が聞き手を巻き込むことができるのも (31) の結果と考えられる。(31) 自体は、提起される行動の意義性は話し手特有のものなのか、それとも話し手と聞き手が共有するものなのかという区別はないため、聞き手にとっても有意義な行動だと理解される可能性はあり、そういう場合は聞き手も共に行動するように勧誘しているというニュアンスが自然に生じることが分かる。

動詞の「う・よう」形で言語化できる行動の意義性は、場面・状況に基づいた、会話参加者全員に共有できるものであるため、話し手が言語化されないことが多い。話し手の言語化はさほど意義性は大きくないためである。ただし例外として、行動の意義性は会話参加者全員に共有しているが、行動の主体が話し手自身でしかあり得ない場合、話し手を言語化することが可能になることがある。(32) (33) (34) を見てみよう。

(32) ここで暮らしてみたいのかね。それなら私が村おさに頼んであげよう。(cf. BCCWJ)

(33) 私も明日から頑張ろう。

(34) マティアス、おまえは運がいい。大祭司殿がすぐ会ってくださるそうだ。私はここで待とう。(cf. BCCWJ)

(32) では行動を行えるのは話し手だけということは明白だし、(33) では話し手を行動者に追加するという意味で行動を行えるのは話し手のみである。(34) では聞き手“マティアス”が一人で“大祭司”に会いに行くため、“ここで待つ”ことの主体は話し手だけである。こういう場合、話し手を言語化して問題ないのである。更に言うと、(32) (33) (34) では意義性があるのは“行動を行う”ことではなく、“話し手が行動を行う”ことであるとも捉えられる。

以上のように、動詞の「う・よう」形は、客体論理・事態志向型論理の英語とは大きく異なる発想によって動機づけられた意義性志向型表現であることが分かる。

6. 結びに代えて

言語現象の論理や成立の動機づけについて、(人間の認知能力など) 一般的なメカニズムだけ

で解釈するのは不十分である。なぜなら、一般的なメカニズムであるため、言語の差異性は説明できない。異なる言語化方略を規定し、差異性を自ずと約束するモデルも必要なわけである。本稿が提出した事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現のモデルは、差異性を自ずと約束する。これを運用して、英語・日本語・中国語におけるいくつかの言語現象のケーススタディを行ったが、その結論を以下にまとめておく。

- 1, 事態志向型表現は高い客体論理性と結びついているが、意義性志向型表現はそうとは限らない。英語の高い客体論理性は、事態志向型表現の指標と捉えられる。
- 2, 意義性志向型表現はメタ事態的構造を動機づける。日本語と中国語の文末助詞は、メタ事態的構造と捉えられる。また、中国語には「了」のような、事態を描写するマーカーから意義性志向型表現へと拡張しているマーカーも見られる。
- 3, 題目マーカーは、特殊な意義性のある内容を切り出す意義性志向型表現と捉えることができる。
- 4, 動詞の「う・よう」形は、話し手が現前の会話の流れ・場面・状況において有意義と賛同され得ると判断した行動を行うことを提起する意義性志向型表現である。

以上の結論を総合的に見ると、本稿で取り扱ったケースにおいて、英語はどちらかというと事態志向型表現に偏り、日本語と中国語は意義性志向型表現に偏る言語、という全体的な傾向性が見て取れる。

本稿では“事態”を比較的に狭義的に捉えているが、これは多言語に対する類型論的な解釈を行うための理論的位置付けである。ビリヤードボール・モデルなど力のやり取りや力の連鎖を記述するモデルは、一般的に定義されている“事態”の内容を全て網羅するモデルではないことは確かであるが、問題は、こういったモデルは日本語や中国語に対する解釈力は不十分である一方⁶、英語に対して高い解釈力を見せているという点である。認知言語学において、“事態”を認知と言語の2つのレベルで取り扱われてきたが、認知文法など、主に英語を対象としてきた理論において以上の問題が見られることは、言語レベルにおける

“事態”をどう定義すべきかへの見直しの必要を示唆していると思われる。本稿における“客体”と“事態表現”は一見、英語を日本語や中国語と区別させるためにわざわざ設定した規定と分類に見えるが、日本語・中国語にもこのように定義した事態表現は見られる。つまり本稿のように言語レベルの事態を狭義的に定義しても、比較的に通言語的なものであり、人間の普遍的な認知経験という事態の一般的な定義とは抵触していない。しかし、言語は必ずしも客体ベースの事態を言語化しなければならないとは限らない。意義性自体は元々形式上のルールを必要としない。意義性志向型表現の形式上のルールは、人間の認知能力など他のファクターの結果と思われる。また、英語ではスル表現が非常に卓越しているが、日本語と中国語ではスル表現とナル表現の両方が見られる。事態志向型表現がスル表現に大体相当するが、意義性志向型表現がナル表現に相当するというわけではなく、有意義な内容を計算し、スル表現・ナル表現問わず、常に最も意義性を出せる形式を選択するのが意義性志向であり、日本語と中国語の特徴でもあると考えられる。

主観性のアプローチでは、主観性の高い日本語は、発達程度の低い原始的な言語と考えられている (Ikegami, 2016) が、本稿のモデルでは、好みの言い回しの問題は、事態把握の仕方とは直接的に結びついておらず、事態志向と意義性志向は、言語の発達段階とは関係ない2つの平等な方略として成立している。故に、日本語・英語・中国語は、進化・発達との程度とは関係なく、あくまでも異なる種類の言語として平等にこのモデルに位置付けることが可能である。“主観的”“客観的”をあくまでも言語現象の記述に用いるのならば問題ないと思われるが、好みの言い回しの動機づけと論理を解釈するとなると、事態志向 vs. 意義性志向は以上の理由で幾分優れていると思われる。

事態志向型表現 vs. 意義性志向型表現のモデルはまだまだ理論的精緻化が必要であり、また他にも解釈できる言語現象は多数あるが、紙幅を考慮して、これらの内容を一旦割愛し、今後の課題とする。

注

1. 本稿では、「」は言語表現の内容または引用内容，“”は概念内容・学術的用語または英語の引用という使い分けがなされている。
2. Whorf が言う “fashions of speaking” は、どちらかといえば、ある言語の内部で好まれている言い回しを指すわけではなく、多言語対照の上にのみ相対的に成立する好みの言い回しを指している。同じ状況に対して、言語 a に表現 A と B の両方も自然だが、言語 b に A だけが自然であれば、a と b の対照において B が a の好みの言い回しということになる。
3. 日常談話において、「意味は分かるけど、そういう風に言わない」というのはこういう場合であることが多い。
4. 出所が明記されていない例文は筆者による作例である。尚、中国語のデータに付いている日本語訳は、日本語の表現として自然であることではなく、中国語の言い回しの特徴を示すことを最優先とすることを断っておく。本稿で取り扱われる中国語は“普通話”即ち共通語である。
5. 本稿のグロス表記は以下の通りである。
1/2/3 : 1/2/3人称
SFP : 文末助詞
COP : コピュラ
CLS : 量詞
NEG : 否定
6. 例えば定延 (2010) は、こういったモデルは日本語に多用されるナル表現を満足に解釈できないと指摘，“カビ生えモデル”を提出している。

引用文献

- Hasegawa, Yoko (2010) *Soliloquy in Japanese and English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and Speculations on Subjectivity. John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*. John Benjamins: 109-150.
- Sapir, Edward (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt, Brace.
- Whorf, B. L., Carroll, J. B (1956) *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. The M.I.T. Press.
- Yoshihiko, Ikegami (2016) Subject-object contrast (shukaku-tairitsu) and subject-object merger (shukaku-gouitsu) in “thinking for speaking”: A typology of the speaker’s preferred stances of construal across languages and its implications for language teaching. Kaori Kabata and Kiyoko Toratani (ed.) *Cognitive-Functional Approaches to the Study of Japanese as a Second Language*. Walter de Gruyter Inc., Boston/Berlin: 301-318.
- 池上嘉彦 (2016) 「〈視点〉から〈事態把握〉へ—〈自己ゼロ化〉の言語学と詩学」『外国語学研究』17 : 1-11.
- 大塚正之・岡智之 (2016) 「場の観点から認知を捉える—主観的把握と客観的把握再考—」『日本認知言語学会論文集』16 : 40-52.
- 尾上圭介 (1995) 「「は」の意味分化の論理—題目提示と対比」『言語』24(11) : 28-37.
- 久野彰 (1973) 『日本文法研究』東京：大修館書店.
- 定延利之 (2010) 「「体験」型デキゴト表現研究の経緯と新展開」影山太郎・沈力 (編) 『事象タイプの記述研究』: 1-16. 東京：くろしお出版.
- 森山卓郎 (1990) 「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2 : 1-19.
- 野村益寛 (2011) 「認知文法における主観性構図の検討」Conference Handbook. 29 : 229-234.
- 黎锦熙 (1924) 『新著国语文法』北京：商务印书馆.
- 沈家煊 (2012) 「“零句”和“流水句”」『中国语文』350 : 403-415.
- 吴凌非 (2002) 「论“了1”和“了2”」『语言研究』46 : 23-27.
- 萧国政 (1999) 「现代汉语句末“了”意义的析离」陆俭明・沈阳・袁毓林 (編) 『面临新世纪挑战的现代汉语语法研究』1-5. 济南：山东教育出版社.
- 肖治野・沈家煊 (2009) 「“了2”的行，知，言三域」『中国语文』333 : 518-576.